

会計プロフェッションのヒューマンドキュメント誌

Accountant's magazine 78

[アカウンタンツマガジン] July 2025 vol. 78



Biographies of Great Person

会計士の肖像

I-GLOCALグループ 代表

蕪木優典

The Accounting Department

経理・財務最前線

**日本たばこ産業株式会社
株式会社キングジム**

Rising Stars of an Auditing Firm

監査法人の未来を担う
エースたち

太陽有限責任監査法人
東京事務所 第4監査グループ マネジャー

足立光陽

The CFO

ニッポンの最高財務責任者たち

株式会社ジグザグ
取締役

北村康晃

USCPA Story

米国公認会計士が活躍する場所

日野自動車株式会社
戦略機能

清水和希

Accountant's magazine July 2025 vol. 78

2025年7月11日発行(季刊) 発行人/安島洋平 編集人/山野由香利
発行/販売/シヤンネンコミュニケーションズ株式会社
〒105-0004 東京都港区新橋四丁目1番1号 新虎通J/CORE

定価550円(本体500円+税10%)



Accountant's magazine CONTENTS July 2025 vol. 78

Staff
発行人/安島洋平
編集人/山野由香利
編集デスク/日野西資延、中村 陽
編集ディレクション/菊池徳行(株式会社ハイキックス)
デザイン/RuffGong DesignStudio
本誌掲載の写真、記事などコンテンツの無断転載を禁じます。
©JUSNET Communications Co.Ltd

Accountant's Opinion Part2 vol. 53

子会社が問題を起こした時に、問われる親会社の責任は当然重い

大原大学院大学 会計研究科 教授
青山学院大学 名誉教授 博士(プロフェッショナル会計学)

八田進二

Biographies of Great Person

会計士の肖像

魅せられたベトナムで起業し、
“シェアナンバーワン”に!
公認会計士の資格取得が、
それを可能にした

I-GLOCALグループ 代表

蕪木優典

The Accounting Department

経理・財務最前線 vol. 69

真のグローバルエクセレントカンパニーに
なるために経理から経営を支える

日本たばこ産業株式会社 経理部

経理・財務最前線 vol. 70

経理&財務を一貫で支援。独自のな
商品開発を支える戦略経理のスキルと視座

株式会社キングジム 経理部

Rising Stars of an Auditing Firm

監査法人の未来を担うエースたち vol. 08

監査は、自分の好奇心を常に掻き立ててくれる仕事。
最高の職場環境を有効活用し、未来への進化に挑み続ける
太陽有限責任監査法人 東京事務所 第4監査グループ マネジャー

足立光陽

The CFO

ニッポンの最高財務責任者たち vol. 69

IPOを実現後、管理から
IRへ業務の軸をシフトし、
事業成長の加速に注力

株式会社ジグザグ 取締役

北村康晃

USCPA Story

米国公認会計士が活躍する場所 vol. 02

日野自動車株式会社 戦略機能

清水和希

26 Accountant's magazine
バックナンバーのご案内

2

4

12

14

16

20

24



魅せられたベトナムで起業し、
“シェアナンバーワン”に!
公認会計士の資格取得が、
それを可能にした

Biographies
of
Great Person
会計士の肖像

vol. 76

Yusuke Kaburagi
I-GLOCALグループ 代表
取材・文／編集部&南山武志 撮影／大平晋也

蕪木優典

僕は会社からのお金を給料ではなく、配当で受け取るようにしています。リーマンショックを過ぎると、売上高は、また毎年30%増のペースに回復。競合がなかなか出てこなかったというのがあるんですけど、顧客のニーズに迅速に応える姿勢が評価されたのだろうと、その点は自負しているのです。

そんなお客さまとの仕事で、一番印象に残るのが、ホテル三日月グループの「ドラマ」です。中国で新型コロナウイルスが問題になり始めた20年1月、武漢からの政府チャーター機に乗った日本人帰国者を受け入れたのが、同ホテルグループでした。他の大手ホテルチェーンが軒並み及び腰になるなか、官僚の皆さんのみならず、当時の安倍晋三首相からも直接連絡を受け、唯一国の要請を受諾したわけです。しかし、その後は新型コロナウイルスが未知の感染症だったこともあって風評被害にさらされ、予約のキャンセルが相次ぎ、結果的に赤字倒産の危機に直面します。

実は、三日月グループは、これに先立つ17年から、社運を懸けたベトナム・ダナン市における日系過去最大投資事業、ダナン湾沿岸の大規模リゾート施設の建設に乗り出していました。商工中金がアレンジャーを務めた90億円のシンジケートローンベースとした、「日本文化を輸出する」というコンセプトの五つ星ホテル構想だったのですが、

思わぬ事態で大ピンチに陥ってしまっただ。資金面で行き詰まるなか、手を差し延べたのが、商工中金の関根正裕社長でした。「日本のために頑張ったホテル三日月に1円たりとも心配はさせない」と、同グループを支えてくれたのです。それに代えて奮闘したホテルの2代目、小高芳宗代表も立派で、見事にピンチをチャンスに変えました。



「公認会計士開成会」でともに幹事を務める池川稔治氏と川瀬裕治氏

苦難をともしした小高さんは、僕にとって顧客というより戦友のような存在です。風評被害に苛まれていた時期には、「ビジネス自体に問題があるわけではないし、御社がベトナムで購入した土地は大幅に値上がりしている。P/Lが厳しくても、B/Sは健全です」と、何度も懸命に励ましました。紆余曲折を経て22年6月にオープン

した「ダナン三日月」は、年間稼働率が70%近くに達し、ダナン屈指の人気ホテルになりました。ダナンには五つ星ホテルが30軒以上あるのですが、今やダナン三日月は宿泊と日帰りを合計すると最大の集客を実現し、日本のホテルの真価を見事に発揮しています。こうした素晴らしいプロジェクトやクライアントにかかわれたのも、ベトナムで独立の道を選んだからこそ。クライアントの成功は、僕の喜びであり誇りでもあります。

「何をやるか」より「誰がやるか」。それが問われる時代

23年には創立20周年を迎え、9月には「ダナン三日月」で、盛大なパーティーを催した。この間、やはり顧客のニーズに応じて給与計算代行の別会社を設立、コロナ禍でも増収を維持する。現在は日系企業の進出支援、会計・税務や労務などのサービスをワンストップで提供するほか、M&Aサポートにも携わり、売上高は十数億円に達している。現地では日系会計事務所も徐々に増えたが、このフィールドでシェアナンバーワンの座は揺るぎない。

従業員は、別会社などを含めたグループで300人ほどになりました。うち日本人は10人くらい。大半を占める

現地スタッフで日系企業をサポートしているのも、当社の特徴といえるでしょう。現地ではできるだけ新卒者を採用して一から育てるといのが、うちのやり方です。丁寧にケアすることで、会社に愛着も持つてくれる。それでも数年で辞めていくことがベトナムでは珍しくないのですが、優秀な人には引き続き仕事を振るし、経験を積んでまた戻ってくるケースもあります。言わずもがなのことですが、ベトナムでビジネスをする以上、現地の人々を信頼し、その幸せを第一に考えることが大切です。うちのモットーは、「Your Growth is Our Growth」。これからも、感謝の気持ちを忘れずに、このモットーを地でいく会社でありたいですね。

考えてみれば、自分たちが何かのサービスを持ち込むというより、お客さまの「これやってよ」という要望に応えているうちに、ここまで来ました。時代は移ろい、AIの活用とか、それ

も含めたDXの必要性が叫ばれていますが、そうなると思います。「何をやるか」より「誰がやるか」が問われる時代になるように思うのです。同じ仕事でも、「I・G・L・O・C・A・L」と一緒に楽しいね」と感じてもらえるかどうか。これからの時代は、そういうところが勝負になるのかもしれない。

「サラリーマンに不向きだった自分にとって、会計士という資格をキャリアのスタートとして取得できたのは、幸運でした」。過去の取材で、藤木はそう述べた。「ただし、資格取得がゴールではありません」という言葉には、若き日に魅力を感じた異国に渡り、そこで唯一無二のビジネスを開花させた人間ならではの説得力がある。そんな彼は今、さらなる「生きた証」を刻むべく、会計士業界を盛り上げ、その活躍の輪を広げる活動に取り組んでいる。

一方、開成学園を卒業した会計士を中心とした「公認会計士開成会」という団体では、幹事として組織の運営に携わっています。折しも開成学園出身の岸田文雄前首相が、自民党の公認会計士制度振興国会議員連盟の会長になりました。政策提言などをしやすくなった環境も生かして、さらに有益な活動ができれば、と思っています。

ベトナムの話ばかりしてきましたけど、近未来の日本は捨てたものではない、と僕は予想します。20年前に日本の街中を大勢の外国人が普通に歩いている風景を想像するのは、困難でした。しかし、今ではベトナム人の留学生も労働者も富裕層も、大挙して日本に来てくれています。そうしたところにも垣間見える、大きな流れ、を捉えつつ、自分自身、日々新たなことにチャレンジしたいと考えています。 ※本文中敬称略



Profile

1972年2月16日 千葉県柏市生まれ
 1994年3月 慶應義塾大学経済学部卒業
 1996年10月 公認会計士第二次試験合格
 朝日監査法人(現有限責任あずさ監査法人)入所
 1999年11月 アンダーセンベトナム(現KPMGベトナム)へ
 2000年4月 公認会計士登録
 12月 ベトナム公認会計士登録
 2003年9月 株式会社I-GLOCAL設立
 2011年10月 カンボジア公認会計士登録
 家族構成=妻、息子2人、娘1人



開成学園を卒業した公認会計士の交流会「公認会計士開成会」のメンバーたち



海外専門家勉強会のベトナム視察。I-GLOCALのホーチミンオフィスにて



在ベトナム日本国大使館での記念写真。藤木氏とベトナムとの縁をつくってくれた梶原優氏(左から3人目)や元駐ベトナム全権大使の梅田邦夫氏(左から4人目)とともに



ホーチミンで開催されたビジネスセミナーで講演する藤木氏



ラジオNIKKEI「グローバル・ビジネス総合研究所」に出演した



お客さまから人気の可愛いドラゴンをモチーフにしたI-GLOCALのノベルティグッズ

会計士の肖像
 History of Yusuke Kaburagi
 50代～(20年代～)

「先生で社長」に。祖母の教えを胸に会計士を目指す

力強い経済成長を維持し、安価な労働力の供給地から有望な市場へと、変貌を遂げつつあるベトナム。蕪木優典がその地に日系初の会計事務所（現I・GLOCALLグループ）を立ち上げたのは、2003年のことだ。ハノイの雑居ビルからスタートした事業は、今や1000社を超える進出日本企業の顧客を抱え、日系ビジネスに関しては、ビッグ4と肩を並べる規模になった。振り返れば、誰も行こうとはしなかった場所に足を踏み出したからこそ、今日はある。若き会計士を衝き動かしたものは、何だったのだろうか。

1972年、千葉県柏市の生まれです。父親は東京大学法学部を出ていたのですが、無類の酒好きが高じて、ニッカウキスキーに就職したという「変わり種」でした。僕が幼稚園の時には、家族を伴って2年間アメリカに赴任。うらやましいことに、「世界の好きなところで酒を飲んで来い」という「研修」だったそうです。

帰国して入学した地元の小学校では、問題児でしたね。僕は。集団行動が苦手というか、とにかくみんなと同じことがやりたくないのです。多様性が持ちたいなななと誘われて。

30年前のベトナムは、今では想像できないほど貧しかったのですが、同時に日本では感じることもない活気に満ちていました。一瞬で魅入られてしま、大学院を休学して通い詰めたほど。今のビジネスの原点がその体験にあるのは、言うまでもありません。

それにしても、叔父は私をとてモカワイがってくれ、ベトナムでも方々に連れて行ってくれましたし、いろんな人たちに引き合わせてくれました。叔父がいなければ今の私も、I・GLOCALLも存在しなかったでしょうから、本当に感謝してもしきれませんね。

合格果たし監査法人へ。自ら手を挙げベトナムに向

96年10月、会計士二次試験（当時）



2024年9月25日に出版された、蕪木氏の著書『加速経済ベトナム—日本企業が純々と躍進する最高のフロンティア』（東洋経済新報社）。今後伸び代が大きい経済市場、ベトナム。注目分野への進出企業の事例から、ベトナムビジネスのリアルな魅力や課題を紹介している

一定評価される今と違い、周囲の目は冷やかかそのもの。そんな子供でも将来のことは漠然と考えていて、すごく心に残ったのが、会社を経営していた祖母の言葉。「先生には学はあるけれども金がない。社長は金持ちでも学がない。優典は先生とも、社長とも呼ばれる人になりなさい」と。なるほどな、と。

母親は教育熱心で、小3からは完全に受験モード。毎日食事と風呂以外は、塾の勉強です。だから、中高一貫の開成学園に受かった時には、地獄のような勉強から解放される、と心底嬉しかったことを覚えています。開成の校風は、いたって自由で水が合いました。中学の終わり頃からは、もてたい一心で友達とバンドを組んだりして。

一方、勉強はやっているふりをしていただけで、成績はギリに近い状況でした。さすがに高2くらいになると、このままだと母親も悲しむな、と。それで、比較的得意だった数学と英語で受験できる慶應大の経済学部ターゲットを絞り、受験勉強を始めたのです。

合否の力を握る英語を克服するために蕪木のとった戦術は、「中1の教科書から地道にやり直す」だった。これが当たり、英語力は面白いようにアップ。教師に、「もし慶應に受かったら、開成の進路指導基準を書き換える必要がある」とまで言われた前評判を覆し、

に合格した蕪木は、大学院を自主退学して、朝日監査法人（現有限責任あずさ監査法人）に入所する。「当時住んでいた家から通いやすかった」というのが、ここを選んだ理由だった。ただ、監査業務自体には、いま一つ魅力を感じられなかったという。

「会計士になったら監査一筋」というのは、ちょっと違うな、と。やってみてわかったのですが、会計士の勉強にはけっこう汎用性がある。もつといろいろなことができるのではないかと、という意識は当時から持っていました。とはいえ、同じチームの先輩、後輩と夜遅くまであれこれ言いながら仕事をしたり、毎晩のように飲みに行ったりというのは、楽しかったですよ。クライアントとも仲がよかったです。

仕事仲間のうちの一人が、僕の学生時代の話聞いて、「ベトナムに行きたい」と言うので、入所3年目の年末年始に一緒に旅行に出かけたんです。後から考えると、これも大きな転機で

見事に現役合格を果たす。そんな経緯で大学生となった蕪木だったが、「1年くらいは遊んでもいいや」という感覚で、勉強といえば、受験で開眼した英語くらい。そんな日々のなか、心に蘇ってきたのが、小学校の時に刻まれた祖母の言葉だったという。

あらためて自身を見つめ直して出した結論は、「公認会計士になる」でした。会計士の仕事がどういうものなのか十分理解していたわけではないのですが、自分が会社員に向いていないのは自覚していたし、医者や弁護士は難しい。士業なら、先生、だし、普通の、社長、くらいは稼げるだろう、と（笑）。

ところが、いざ予備校に通って勉強を始めてみたら、どうにもつまらない。何回かやめようと思いましたが、親に授業料を出してもらっている手前もあるし、なんとか2年時に日商簿記の3級と2級、4年時には1級を取得。当時は、とにかく資格を取って、その先はまた考えよう、くらいの気持ちでした。大学卒業後は、早稲田の大学院会計研究科に進学し、そこで会計士試験の突破を目指すことにしました。

実は、僕が初めてベトナムに行ったのは、大学院時代だったんです。医師だった叔父の梶原優典が、将来の日本の看護師不足を見越してベトナムの若い世代に日本語を教え、ゆくゆくは来た。ベトナムには、朝日監査法人が提携し、駐在員も置いていたアサー・アンダーセンの現地事務所があったので、立ち寄って挨拶したのです。「僕、ベトナム大好きです」と。そうしたら、後日、「駐在の後任を探している」と連絡がきた。

当時のベトナムは、会計士業界ではほぼノーマーク。欧米への駐在と違い、都落ちのイメージもありました。でも、国内で監査業務を続けることに限界を感じていた僕にとっては、渡りに船。ベトナムが大好きで、そのポテンシャルに大きなチャンスを感じていましたから。「ぜひ行かせてください」と自ら手を挙げて、現地に赴任したのは99年の11月です。当時、僕は27歳。まだ会計士補という立場でした。

ただ、念願かなって蕪木が現地に着任したのは、97年から始まったアジア通貨危機の影響が色濃く残り、ベトナムへの投資熱もいったん冷めかけた「最悪のタイミング」。そんななか、会計に関する仕事は何でもやる、という姿勢で仕事に取り組んだ蕪木は、着実に営業成績を伸ばしていく。出向翌年の2000年には、日本人初のベトナム公認会計士の資格も取得した。

その会計士試験は、英語の選択式でした。けっこう落ちる人もいましたが、

会計士の肖像

Yusuke Kaburagi ~20代 (1970年代~1990年代)



難関中学校の合格を目指し、勉強に励んでいた小学生時代の蕪木少年



開成中学校・高等学校に進学。開成時代からの親友、黄泰成氏も公認会計士に。現在、黄氏はスターシアグループの代表を務めている



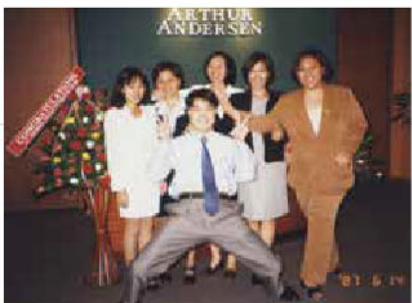
叔父であり、医師の梶原優典氏と。梶原氏の勧めで初めてベトナムを訪れた



活気ある国、ベトナムに魅了され、大学院時代に何度も渡越している



朝日監査法人（当時）に入所して3年目、念願叶いベトナム事務所への出向が決まった



アンダーセンベトナム（当時）のスタッフたちと



サービスを持ち込むのではなく、顧客のニーズに応じて事業は成長した

今よりも法律が少なく、シンプルだったので、事前に対策を講じておくことで、合格できました。ベトナムでは、会計士であることが代表者の要件になっていて、後に出資要件にもなったので、この資格は非常に重宝しましたね。

現地では、ようやく増え始めてきた日本企業の進出サポートがメインの仕事です。監査法人ですから、当然法定監査もやるわけですが、日本ではしたことのないような監査報告書へのサインをした時には、ちよつと不思議な気分になりました(笑)。

ただ、法律の数が少ない分、実務に当てるのに苦労することもしばしば。移転価格税制もなく、付加価値税ができたのも、僕が赴任して以降でしたから。M&Aもほとんどない。その代わりというか、営業には足しげく通い、お客さまの要望を聞いて、いろんなことをやりました。会社の設立から手伝ったり、会計ソフトの導入を支援したり。「やたらと物が盗まれる」という相談に応じて、対応策を検討したようなこともありました。

そんな感じで、出向1年目はあつという間に過ぎました。2年目には、腰を落着けて仕事ができるようになった。でも、3年目ぐらいになると、やっぱり行き詰まりみたいなのを感じた。進出してくる会社からは、毎回同じ質問ばかり。これでベトナム

いきおい仕事を取ってくるよりも、来た案件をどうやって回すかが、業務の中心課題になりました。当時ほとんかく募集をかけて、やってきたベトナム人を面接し、できそうだったら即内定、みたいな感じでした。

痛い目にも遭いました。ある日、面接に来た男性が「私には会計の知識がある」と自信満々に言うので、例によってその場で内定を出し、「早速明日この会社に行ってください」と仕事を振ったわけです。いい人材が見つかったと喜んだのも束の間、翌日派遣先から「誰にも来ない」と連絡が来た。慌てて当人に電話すると、「アイ・アム・ビジー」

に来た意味があるのだろうか、と日に日にジレンマは膨らむ一方でした。

ベトナムで独立。日系企業のサポートに乗り出す

出向から3年目の02年、アーサー・アンダーセンが、解散に追い込まれる、という事態が発生。自らの行く末について悩んでいた藤木にとっては、一つの決断を下す機会を与えられた格好だ。帰国して監査に携わるという選択も、もちろんあった。だが、迷った末に、「ベトナムで独立・起業する」という結論に至る。03年、監査法人を退職した藤木は、同年9月、首都ハノイに日系企業へのサービス提供を目的とした現地法人を設立したのである。

生活の安定を考えたら、あずさに戻るとするのが「正解」だったかもしれない。会計士になる前の僕の出向を認め、様々な経験をさせてくれた法人には、恩義も感じていました。でも、再び気乗りのしない監査をやるのには、抵抗が……。勇んでベトナムに来たものの、3年では自分をアップグレードさせられなかった、という思いも強かった。カッコつけた言い方に聞こえるかもしれない。僕が、生きた証を残したい。と真剣に思っていて、それは人生の目的と言ってもいいでしょう。

だと(笑)。実際、似たようなトラブルを何度か経験しました。経済成長著しい当時のベトナムは、日本のビジネスの常識がそのまま通用しない所でもありました。もともと、ベトナムには優秀な人材が多いのも事実で、創業当初から当社を支えてくれている優秀なスタッフもいますし、今いるスタッフたちは皆、やる気と好奇心に満ちています。ベトナムという国と同様、成長意欲が旺盛なので、いつも刺激をもらっています。ありがたい限りですね。

繰り返しになるが、当時のベトナムには、同様の役割を担う事務所はほと

それに照らせば、縁あってベトナムの会計士資格を初めて取った人間の進むべき道は、明らかでした。

そうした経緯で現地に設立したのは、会計系のコンサルティングファームです。マーケットの限られる会計にこだわらず、顧客に頼まれたらできることは何でもやる、というスタンス。もちろん、やみくもに飛び込んだわけではありません。狙ったのは、ビッグ4が対応しないようなサービス、と言えればわかりやすいでしょう。そもそも当時のベトナムには、現地での仕事を日本語で回せる会計事務所が存在しませんでした。そこをフォローしてもらいたい、という潜在需要に溢れていたのです。

ベトナムの可能性に懸けたチャレンジは、当たりました。起業してすぐの頃こそ、静かだったものの、数カ月して当社の存在が知られるようになる。仕事のオフアワーが引きも切らず、という状況に。信じられないことに、ビッグ4からも依頼が来た。「クライアントのこのニーズには対応できないので、やってくれないか」と。現地のジエトロや日系の銀行などからも、「ぜひ支援してほしい」と、次々に顧客を紹介されて。営業しなくても、クライアントが向こうからやってきました。

ただ、そうなるのと直面したのが、人の問題です。ニーズはあるのに、それに応えられる人材が圧倒的に足りない。

んどなかった。業種的にはコンベンチターのビッグ4とも、市場の、棲み分けができていたため、まさにブルーオーシャン。様々な問題に直面しながらも、年商は創業2年目から文字どおりの倍々ゲームで伸びていった。その成長に冷や水を浴びせたのが、08年のリーマンショックだ。3億円ほどの年商は、一気に2割以上もダウン……。しかし、このピンチも、自ら、痛みを引き受けることで、何とか乗り切った。

まず自分の給料をゼロにし、同時に最低限必要なリストラもやり、結果的に利益を減らさずに済んだ。それ以来



会計士の肖像

History of Yusuke Kaburagi 30代~50代 (2000年代~2020年代)

2003年、ベトナムでI-GLOCALを起業。マネージングパートナーを務める實原享之氏と



2022年に開業した、「ダナン三日月ジャパニーズリゾート&スパ」。本プロジェクトの成功にI-GLOCALグループも尽力した



2023年、I-GLOCAL設立20周年パーティーをダナン三日月で開催。ビーチに社名を人文字で描いた



設立20周年パーティーには、スタッフの家族も招待



夜まで大いに盛り上がった設立20周年パーティー。スタッフや仕事関係の仲間たちと



ホテル三日月グループの小高芳宗代表とともに、巻頭対談に登場した日経ムック「中堅・中小企業のASEAN進出2025年版」(日本経済新聞出版)